

司会 天根 哲治 (兵庫教育大学)

子どもたちの対人関係能力の向上に有効だと考えられる社会的スキル訓練 (social skill training) を学級単位で実践するための理論的背景と方法について講習が行われた。社会的スキル訓練は、本来「個人」単位で実施されるものであるが、学級の人間関係のダイナミクスや子どもをとりまく社会的背景などを考慮すると「学級単位」で実施する方が効果的かつ現実的であり、そのような意味では「社会的スキル教育」と呼ぶ方が適切だとも考えられるというのが講師の基本的立場である。

内容は以下の通りであった。まず理論的背景として、①「社会的スキルという観点」が紹介され、たとえば級友との関係が良好でない子どもをこの「観点」で見ると、その子がそのように行動するのは「学習の結果」であると捉えられることが説明された。次いで、②社会的スキルを教えることの大切さ、③社会的スキルの獲得過程(言語的教示、オペラント条件づけ、モデリング、リハーサルなど)について説明がなされた。そして、④昨今の家庭や家族のあり方、地域社会の教育力、子どもたちの放課後の過ごし方などに言及しながら、社会的スキルを「教室で」教えることの意義が論じられた。

次に、社会的スキルを学級単位で教える際の実践法について解説がなされた。具体的には、小学校での社会的スキル授業のビデオを提示しながら、インストラクション、モデリング、リハーサル、フィードバック、般化などについての説明がなされた。また、子どもたちに教えるべき社会的スキルについては、基本的には教師が設定すれば良いものであるとし、参考として、教室で教えられる社会的スキルについて、初級、中級、上級に分けて紹介がなされた。さらに、「やさしい・あたたかい言葉かけ」を例として、授業の指導案や学習シートが紹介された。

主な質疑応答は以下の通りであった(表現は必ずしも発言通りではない；「」内は講師の応答)。

①何を教えるかは価値観と関係するが、社会的スキル訓練では目標と価値との関係をどのように考えているか?⇒「属する社会・文化における価値と大いに関係」

②日本では学年に応じた系統立った訓練プログラムは開発されていないのか?⇒「今までのところ一切ない。日本の教育現場では行動主義的発想を嫌う傾向があることも一因か」

③1時間の授業として位置づけるのは、学校の現状では非常に難しい。道徳の授業の中などで、分割して取り組んでは?⇒「“これはスキルである”ということを意識させることが重要。必ずしも1授業時間をフルにとらなくても良い」

④人間関係に障害を持つような自閉症の子や、対人関係の未熟さゆえに不登校状態にある子どもに対する有効性

は?⇒「そのような子どもに対しても有効だ。学級全体で実施しながら、特に必要な子には特別にトレーニングをするのが理想的」

⑤般化と評価について?⇒「いろいろな般化を総合して評価するのが理想的ではあるが、ステップを踏んで評価すると良い」

講習会終了後も質問者が数多く見られた。本講習会への参加が実践のきっかけとなれば幸いである。

講習会3 因果推論の基礎

講師 坂元 章 (お茶の水女子大学)

司会 宮元 博章 (兵庫教育大学)

坂元氏は、これまでメディア、特にテレビゲームやインターネットが人の能力や性格の発達に及ぼす影響などについて研究してこられたが、領域上、統制実験の実施が難しい場合が多く、そのため統制実験以外の方法で因果関係を推論する必要に迫られてきたという。本講習会では、このような研究背景を踏まえて、因果推論の方法、特に「パネル研究」という方法を中心に講義をしていた。

講習に先立ち、受講者の内訳を調べたところ、もっぱら心理学を専門とする大学院生と研究者であったので、受講者はみな統計の基礎的素養を持っているという前提で話していただいた。

まず、心理学の研究における因果関係について、「一方が生起したときに、それが原因となって他方が生起する確率が高まる関係」と定義された。次に、相関関係は因果関係を特定しない点が指摘された。それは、逆方向の因果関係や第3変数による擬似相関があり得るからである。一時点での調査による相関関係をもとに因果関係を主張するのは不十分であるという認識の上で、因果関係を明らかにする方法として、①条件統制(実験、準実験)、②縦断的観察(パネル研究、時系列分析)、③道具的変数を利用する方法が挙げられた。本講習会では、このうち、主に①と②について説明がなされた。以下、筆者の理解できた範囲で講義の概要を要約する。

条件統制が完全な場合を「実験」と呼ぶ。実験においては、無作為割り当てなどによる被験者の同質性や、状況の同質性が保証されていることが前提とされるが、そのような厳しい条件統制を現実的な場面で行うことは実行上困難な場合が多い。そこで、実際には、しばしば「準実験」法が採られることになる。準実験では、被験者と状況の異質性を認めた上で、事前・事後測定の変化を比較することが基本である(事後測定だけのものは「偽実験」である)。ただし、実験群と統制群の異質性に関しては、なんらかの対処がなされなければならない。そのための方法として、事前測定によって実験群と統制群の被験者の

平均が等しくなるようにマッチングさせる方法や、事前測定の値を統制変数として共分散分析を行う方法などがあるが、いずれにせよ測定誤差による問題（回帰の問題など）は回避できない。もっとも、こうした問題を排除するための方法として、実験群の事前得点よりも事前得点の高い統制群と低い統制群を設けて挟み込む方法、さらに、事前－事後の変化が独立変数とは無関係な時系列的变化（トレンド）に起因する可能性を排除するために、事前測定を2回行う方法などがあり、工夫と労力によって因果推論の精度を増していくことができる。

次に、縦断的観察についてであるが、縦断的観察としては、測定時点数の少ない場合のパネル研究と、多い場合の時系列分析がある。本講習会では、主にパネル研究について説明された。パネル研究とは、同一被験者に複数回にわたって同じ指標についての測定を行い、分析する方法である。その最も単純な形態は、1回目の測定時に独立変数と同時に従属変数も測定しておき、2回目の従属変数を予測する重回帰分析を行う方法である。しかし、この方法では、第3変数の問題や測定誤差の問題はクリアされない。

より進んだ分析として、独立変数、従属変数をそれぞれ2回ずつ測定し、交差する2つの相関の大小を比較する「交差遅れ相関分析」が挙げられる。この方法では、第3変数の影響を排除できるという利点がある。ただし、

この分析では、同時性、定常性、安定性といった多くの前提が満たされている必要があり、また検出力が弱いという難点がある。

さらに進んだ分析法として、「構造方程式モデル(SEM)分析」について説明された。この分析の特徴は、測定変数と概念変数、誤差からなるモデルを構成してそれぞれの要素間の影響を算出することにより、誤差を切り離すことが可能になると同時に、モデルそのものの適合度を算出できることである。モデルとしては、「双方向モデル」、「交差遅れモデル」などがあるが、適合度を考慮しながら、これに誤差相互の影響を組み入れたり、既測定のまま未測定の変数をモデルに組み入れたり、測定時点を3回に増やしたりすることで、多様で融通性のあるモデル構成が可能になる。

最後に、まとめとして、パネル研究を実際に行っていく上でのデータ収集と分析の手順の概略が示された。

この後、フロアからの質疑が求められたが、特に出なかったもので、司会者からの要請で、データ収集や分析の具体的事例として講師自身が行った研究を紹介していたが、残りの時間で、測定時点数の多い「時系列分析」について簡単に紹介していただいた。

*文責は、前書きと講習会1が吉田寿夫、講習会2が天根哲治、講習会3が宮元博章である。